

編集後記

<編集顧問>

鈴木 秋悦
武田 佳彦
青野 敏博

<編集委員>

岡井 崇
神崎 秀陽
倉智 博久

本誌編集委員の岡井崇先生が書かれた「ノーフォールト」を原作とするテレビドラマが放映されています。医学部の学生や研修医に聞いてみますと、ほとんどの人たちが見ていると答えてくれます。本当に多忙な岡井先生が小説を書かれた背景を考えると、この番組の人気の高さを大変心強く、また、嬉しく思っています。

画面の一場面、一場面で、藤原紀香扮する主人公がこんな態度で研修医に当たったら産婦人科の教育体制が「こんなものか」と感じられはしないか？ こんなに救急患者が続いたら学生は「こんなにリスクで、忙しすぎるのが産婦人科の現場なのか」と思って敬遠しないだろうか？などと余計な心配をし、失礼ながらはらはらしながら見えています。

ほんの数年前に産婦人科がおかれていた状況を考えると、このようなドラマが放映され、産婦人科に追い風が吹きつつあると実感でき、岡井先生にも心から感謝しています。しかし、前回の編集後記でも書きましたが、このような状況でこそわれわれの教育者として、臨床医として、また研究者としてのパフォーマンスが改めて問われるのかと思います。

われわれの仕事で、臨床・教育面の充実がまず重要なことであることは言を待ちませんが、これは研究を軽視してよいということではありません。最近、産婦人科学会全体に研究成果がやや乏しいようにも感じています。これは由々しいことで、再度、研究も重要であることをリマインドすべきです。その意味では、日本産科婦人科学会のなかでも、専門医の受験資格や研修指定病院に一定の研究業績を求めようとしているのは正しい方向性かと思います。

(倉智 博久)